日本建築学会 北海道支部
研究報告集 No.91（2018年6月）

現代日本の建築論において参照される建築に関する研究

正会員　○櫻井太貴*1
正会員　　山田深*2

9. 建築歴史・意匠-7. 意匠論
現代日本の建築論、言説、KJ 法、参照内容、参照根拠、建築家

1. 序

1-1. 研究背景・目的

一般に建築家は、建築物などの実体的な創作物を設計する一方で、著述や講演などの言語的な創作活動も行っている。その中で、建築家は創作活動の際に、様々な水準で建築を参照し、新たな建築や思考を生み出すための礎としている。例えば R・ヴェンチューリは自身の建築論で建築の形態や構成などを参照することで新たな概念や建築を創作している[1)]。また、C・ロウの建築論では、ガルシュの住宅やバウハウスのファサードや平面構成といった、特定の内容に着目し、対照的に参照することで、新たな概念を明確化している[2)]。このように建築家は建築を参照することで新たな建築や概念をつくるための礎としている。そこで本研究は、建築家の論考を対象として参照される建築について分析することで建築論の枠組みの一端を捉えることを目的とする。

1-2. 研究の概要

本研究は、建築論[3)]で参照されている具体的な建築[4)]（以下、【参照建築】）のどのような内容に着目しているのかを〈参照内容〉として抽出、分類する。また建築論の中の【参照建築】をなぜ参照したのかに関する記述を｛参照根拠｝とし、北澤らの研究[5)]の着目根拠のカテゴリーを参考に分類する。これらからは、建築をどのように参照し、建築論を構想しているのかを読み取ることができる。

そして、〈参照内容〉｛参照根拠｝の対応関係を【参照建築】のカテゴリーごとに分析し傾向を比較することにより、建築論の枠組みの一端を捉える。

次に、多く参照された建築家の視点から【参照建築】を〈参照内容〉｛参照根拠｝の対応関係と〈参照内容〉と｛参照根拠｝をそれぞれ比較、考察することによって建築論において建築家がどのように参照されているのかを明らかにする。

図 1　抽出方法

表 1　【参照建築】のカテゴリー別サンプル数と割合

【参照建築】						
649						
日本建築			西洋建築			その他
460			189			
70%			29%			
現代建築	近代建築	古典建築	現代建築	近代建築	古典建築	
343	51	66	60	97	33	5
52%	8%	10%	9%	15%	5%	1%

2. 【参照建築】〈参照内容〉｛参照根拠｝の分類

本項は 186 本の建築論より抽出した【参照建築】〈参照内容〉｛参照根拠｝の分類・考察を行う。

【参照建築】は【日本建築】【西洋建築】【その他】の３つに大別され、さらに 6 つの側面に分類された（表 1）。分類結果から傾向を見ると、【日本建築】の【現代建築】の割合が最も多く、【西洋建築】の中では【近代建築】の割合が【日本建築】より多いことがわかる。ここから、近代から現代にかけて、西洋建築を礎に、現代日本の建築論、建築が主に思考される傾向にあると言える。

〈参照内容〉は〈人・社会〉〈都市〉〈歴史・伝統〉〈建築〉の 4 つに大別され、さらに複数の側面に分類された（表２）。分類結果から傾向を見ると、〈建築〉

表 2　〈参照内容〉のカテゴリー別サンプル数と割合

〈参照内容〉																								
978																								
人・社会				都市	歴史・伝統				建築															
88					56				816															
9%					6%				83%															
生活像	利用者	経済性	その他		日本らしさ	様式	その他		構成					性質		つくり方		概念	機能		技術			
									261					223		83			75		145			
									27%					23%		8%			8%		15%			
									部分と全体の関係			建築と外部の関係												
									17%			10%												
									構成部位による	形態の構成	空間の構成	自然と建築の関係	都市・街と建築の関係	その他	精神的	物質的	手法	プロセス	用途	その他	構造・構法	素材・仕上げ	環境工学	装飾・インテリア	その他
18	25	8	37	18	18	28	10		21	46	98	27	39	30	73	150	58	25	29	43	32	39	56	16	30	4
2%	3%	1%	4%	2%	2%	3%	1%		2%	5%	10%	3%	4%	3%	8%	15%	6%	3%	3%	4%	3%	4%	6%	2%	3%	0%

表 3　｛参照根拠｝のカテゴリー別サンプル数と割合

｛参照根拠｝							
685							
建築・時代性の批評			建築をつくる方法を抽出			建築における概念を明確化	
144			389			152	
21%			57%			22%	
個別的な批評	時代性を把握	時代から逸脱の	建築の形を抽出	建築表現を追求	設計姿勢を学ぶ	根源へ遡る	新たな視点を提示
39	41	64	61	284	44	73	79
6%	6%	9%	9%	42%	6%	11%	12%

Study on referenced architecture in contemporary Japanese architectural theories

SAKURAI Taiki et al.

の〈構成〉と〈性質〉の割合が多く〈構成〉の中では、〈空間の構成〉が多い。ここから、建築家が建築論を創作する手掛かりとして空間について思考する傾向があると言える。

{参照根拠}は、{建築・時代性の批評}{建築をつくる方法を抽出}{建築における概念を明確化}の 3 つの側面に大別され、さらに 8 つに分類された(表3)。分類結果から傾向を見ると、{建築をつくる方法を抽出}の割合が最も高く、その中でも、{建築表現を追求}の割合が高いことから、私的な表現や空間をつくる方法など、建築の表現に関する思考を発展させるために建築を参照している傾向が見られた。

3.【参照建築】の〈参照内容〉－{参照根拠}

【参照建築】の分類結果から【参照建築全体】【日本建築】【西洋建築】【現代建築】【近代建築】【古典建築】について〈参照内容〉{参照根拠}の対応関係を考察する。例えば【日本建築】では〈技術〉〈構成〉〈性質〉－{建築をつくる方法を抽出}の関係が強いことや、【古典建築】では〈様式〉－{建築における概念の明確化}の関係が強いことなど、傾向が見出された。ここでは、代表例として【参照建築全体】の対応関係を詳しく考察する。

3-1.【参照建築全体】

【参照建築全体】の〈参照内容〉と{参照根拠}の対応関係を示したものが表 4 である。この表を見ると、A～D の類型にまとまりがあるものや該当数の多いものが見られる。これらは、【参照建築全体】の中で、〈参照内容〉と{参照根拠}の関係の強いものであるといえる。例えば、A や B のまとまりからは、〈性質〉〈構成〉と{建築を作る方法を抽出}の関係が強いことがうかがえる。

A の類型は、形態の持つ効果や感覚といった、曖昧な建築の内容を追求するために建築の形態を通して知覚する意味的内容を参照している傾向が見られた。この類型は、【参照建築全体】の対応関係において最も多くのサンプルが集まったものである。例えば、図 2 は{建築の祖型の持つ意味を抽出する}ために【ガララテーゼの集合住宅】が持つ〈空虚な感覚〉についての内容を参照しているものである。

B の類型は、室の配列や建築と街の関係など建築を構成する要素の関係また、建築と外部要素との関係といった内容を参照することで建築の空間や形態をつくる方法を模索するものが見られた。この類型の中でも特に{建築をつくる方法を抽出}と〈構成〉の〈空間の構成〉と強い関係が見られた。例えば、図 3 は{すまいを構成する方法を追求する}ために【谷川さんの家】の〈主屋と付属屋を渡り廊下により連結した空間構成〉を参照しているものである。

A と B ふたつの対応関係からは{建築をつくる方法を抽出}は〈構成〉と〈性質〉に強く関係していることが読み取れる。これは、空間や形態を思考することと深い関わりがあり、建築家の創作活動において形や空間、その性格の思考が多く参照されている傾向がみられた。

表４　【参照建築全体】のクロス集計表

参照内容 ＼ 参照根拠		人・社会				都市	歴史・伝統			建築																	
		生活像	人	経済性	その他		日本らしさ	様式	その他	構成							性質		つくり方		概念	機能		技術			
										部分と全体の関係			建築と外部の関係														
										部分による構成	形態の構成	空間の構成	自然と建築の関係	都市・街と建築の関係	その他	精神的	物質的		手法	プロセス		用途	その他	構造・構法	素材・仕上げ	環境工学	装飾・インテリア	その他
建築・時代の批評	個別的な批評	0	0	1	5	3	0	3	0	0	3	1	0	0	0	0	7	3	0	3	2	2	5	3	2	2	2	0
	時代性を把握	0	0	3	9	0	1	1	1	0	2	5	1	4	3	4	9	3	4	3	3	3	1	2	2	4	1	0
	時代からの逸脱	1	1	1	2	3	2	0	3	1	3	8	3	0	0	10	11	3	1	3	3	3	8	3	4	0	3	2
建築をつくる方法を抽出	建築の形式を抽出	1	4	1	0	0	0	1	0	0	3	16	0	3	1	15	10	1	0	0	5	0	5	0	0	0	2	0
	建築表現を追求	8	11	1	2	7	5	6	3	12	33	46 B	18	28	20	24	72 A	43	3	11	18	7	7	19	37 C	7	14	2
	設計姿勢を学ぶ	2	6	2	9	1	0	0	0	0	0	3	3	0	1	4	6	1	3	2	4	2	4	4	4	3	2	0
建築における概念を明確化	視野へ迫る	2	1	0	0	1	9	7	2	5	2	9	0	0	1	16	19	3	1	1	7	0	2	4	0	6	2	
	新たな視点を提示	5	6	0	11	4	0	10	2	3	0	14	2	4	6	8	21 D	2	14	8	1	9	1	3	0	0	0	

新建築 1982.09　建築論名　祖型への問い　著者　三宅 理一

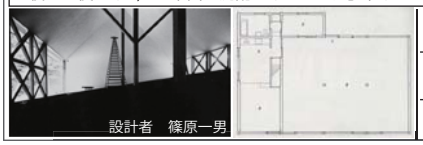
建築の祖型とは,場合によっては,地中海の集落から得られた白い住宅であったり,光と闇の二元論的空間であったりした.こうした祖型を改めて確認することは現代建築の状況を考える上でもきわめて重要である.
1930年代建築の持つ「がらんどう」の感覚は現代建築にとっても大きなテーマたり得る.たとえば,アルド･ロッシを考えていただきたい.ガララテーゼの住宅が一種の「貧しさ」を転換して形而上学的な空間を生み出しているのは,こうした「空虚」な意識に基づくためである.コンクリートと床面に角柱が連続し,所々でその連続が途切れたり,スケールが変調する.この空間は,光ではなく影を予感したものと見做すことができる.列柱の影がコンクリート面の上を動き,あるいは人間までもがただの影としてこの空間を横切る,ある一瞬,ある場面が予感され,それが刻一刻と変化する.

【参照建築】
ガララテーゼの集合住宅
〈参照内容〉
性質
{参照根拠}
建築をつくる方法を抽出

図 2　〈性質〉－{建築をつくる方法の抽出}の例

新建築 1982.09　建築論名　住宅論　著者　篠原一男

谷川徹三先生の書斉の前にたてるという仕事を,間違いなくはたすためには,もっとも無性格な空間をつくること以外にないと考えた内側からすまいを構成しようという,わたくしの一つの方法は,このとき徹底して進められた.……主屋と附属屋とは,構造的に独立している空間で,内部に構造柱がなく,この二つの空間を渡り廊下で《連結》したものである.わたくしの平面のなかでは唯一の《空間の連結》である.…ふすまによって分割された主屋の二つの空間は,南の室･北の室･と名づけられた.どちらを居間に,あるいは寝室に使っても,この平面に混乱はないという意味である.



【参照建築】
谷川さんの家
〈参照内容〉
構成（空間の構成）
{参照根拠}
建築をつくる方法を抽出

図 3　〈構成〉－{建築をつくる方法の抽出}の例

4. 各建築家の〈参照内容〉－{参照根拠}

本章は、建築論において多く参照された建築家[6]であるル・コルビュジェ、丹下健三、ミース・ファン・デル・ローエ、ルイス・カーン、伊東豊雄、篠原一男の建築作品を〈参照内容〉{参照根拠}の対応関係と〈参照内容〉と{参照根拠}をそれぞれ比較、考察することによって建築論において建築家がどのように参照されているのかを明らかにする。ここでは、建築家の中でも特に多く参照されたコルビュジェ、丹下の二人を具体例として挙げ、考察する。

2-1. ル・コルビュジェ

表 5 より〈人・社会〉〈構成〉〈性質〉－{建築をつくる方法を抽出}の該当数が多いことから関係が強いことがわかる。この中でも構成の側面は建築の発

想法や建築の構成が持つ効果、外部と建築の関係など、建築をつくる方法を模索するために参照されている例が散見される。また、〈構成〉に関する内容は【ユニテ・ダビタシオン（以下、ユニテ）】の１ユニットの住戸形式を反復させ部分から全体を構成する〈部分による構成〉、【サヴォア邸】の複数の形態のエレメントを統合する〈空間構成〉とピロティによる〈外部と建築の関係による構成〉が参照されている。このように、コルビュジェの建築は複数の構成的視点で参照されている傾向がある。

次に、コルビュジェの【参照建築】の中で最も多くのカテゴリーに属する【ユニテ】についてみる。【ユニテ】は実験住宅の取り組みにおける集大成であり、｛新たな住居形態を模索する｝ために、その〈生活像〉や〈住民が共有するイコンとしての佇まい〉についての内容が参照される。また、前述した〈ユニットによる構成〉においても参照されることから【ユニテ】は多角的な視点から参照される傾向があると言える。

2-2. 丹下健三

表６より〈性質〉〈構成〉－｛建築をつくる方法を抽出｝、〈技術〉－｛建築・時代性の批評｝の対応関係が多くみられた。〈性質〉についての内容は、建築の外観を通して感じる、迫力や繊細さといった人の印象や感覚についての内容が多く、〈構成〉についての内容は、建築と都市の関係についての内容が参照され、〈外部と建築の関係〉に属するものが多い。ここから、丹下は建築と都市などの外部環境との関係について参照される傾向があると言える。また、〈性質〉〈構成〉は｛建築の方法論や風景と建築の関係の追求｝など、建築をつくる方法や表現を模索するために参照されている。

次に、丹下の建築の中で最も多くのカテゴリーに属する【香川県庁舎】についてみる。【香川県庁舎】は、｛日本の空間の論理を現代に展開した建築の例｝として、〈日本らしさの表現〉について内容が参照されているものや、｛近代建築の論理を逸脱した建築の例｝として、〈日本の伝統的形象〉についての内容が参照されているものがある。このように、【香川県庁舎】は近代建築を逸脱し、日本の伝統的な形象を生かし新しい近代建築の表現を展開したものとして参照される傾向にある。

3. 建築家の対応関係の比較

本章では、前述した建築家６名の〈参照内容〉と｛参照根拠｝について、それぞれの傾向を比較する。

3-1. 建築家〈参照内容〉の比較

図４より、各建築家の〈参照内容〉の特徴と傾向を比較する。全体の傾向を考察すると、〈参照内容〉は各建築家によって特徴が見られる。コルビュジェや丹下、伊東は各カテゴリーの割合によって偏りはあるが、多くのカテゴリーに属している傾向がある。また、カーンと篠原のカテゴリーからは大きな傾向が見られ、カーンは〈技術〉の割合が多く、篠原は〈構成〉や〈性質〉の割合が多くを占めている。次に、前述したコルビュジェと氏から影響を受けた丹下を比較すると、〈構成〉〈性質〉の割合が共通して

表５　ル・コルビュジェの〈参照内容〉－｛参照根拠｝

ル・コルビュジェ		参照内容 人・社会	都市	歴史・伝統	建築 構成	性質	つくり方	概念	機能	技術	根拠合計
参照根拠	建築・時代性の批評	2 no.133 ユニテダビタシオン no.426 ロンシャンの教会	3 no.259 輝く都市 no.375 300万人都市 no.377 輝く都市	2 no.59ロンシャンの教会 no.60 ラ・トゥーレット修道院		2 no.238 ラ・トゥーレット修道院 no.239 ロンシャンの教会					9
	建築をつくる方法を抽出	4 no.576 300万人都市 no.404 ユニテダビタシオン no.577 ヴォアザン計画 no.578ヴァイゼンホーフ・ジートルンク	3 no.355 シャンディーガル都市計画　no.576 300万人都市　no.577 ヴォアザン計画		4 no.56 西洋美術館 no.176 サヴォア邸 no.354ユニテダビタシオン no.534 サヴォア邸	4 no.56 西洋美術館　no.57 ユニテ・ダビタシオン　no.58 シャンディーガルの最高裁判所 no.112 ロンシャン教会	2 no.354 ユニテダビタシオン no.355 シャンディガール都市計画	1 no.404 ユニテダビタシオン		1 no.589 スイス学生会館	19
	建築における概念を明確化				2 no.91 カーペンター視覚芸術センター no.424 サヴォア邸	1 no.354 ユニテダビタシオン		1 no.258 輝く都市		1 no.424 サヴォア邸	5
内容合計		6	6	2	6	7	2	2		2	

ユニテダビタシオン ⑦

ロンシャンの教会 ④

サヴォア邸 ④

※○の数字は表の該当数を示す。

表６　丹下健三の〈参照内容〉－｛参照根拠｝

丹下健三		参照内容 人・社会	都市	歴史・伝統	建築 構成	性質	つくり方	概念	機能	技術	根拠合計
参照根拠	建築・時代性の批評			2 no.86 香川県庁舎 no.134 香川県庁舎			1 no.103 図書印刷原町工場		2 no.97 広島平和記念資料館 no.487 横浜美術館	5 no.36日南文化センタ no.135 倉敷市庁舎 no.273香川県庁舎 no.332広島国際会議場 no.370大阪万博お祭り広場	10
	建築をつくる方法を抽出		1 no.379 東京計画1960	3 no.41東京都庁舎no.134 香川県庁舎no.272 香川県庁舎	4 no.104 中日クウェート大使館 no.517 国立代々木競技場 no.516 香川県庁舎 no.519 広島平和記念館	6 no.101　静岡新聞・静岡放送東京支社　no.381 山梨文化会館　no.382 静岡新聞・静岡放送東京支社　no.515 国立代々木競技場　no.517広島平和記念館no.537　東京カテドラル聖マリア大聖堂	1 no.613 国立代々木競技場				15
	建築における概念を明確化				2 no.636 香川県庁舎 no.654 国立代々木競技場				1 no.654 国立代々木競技場		3
内容合計			1	5	6	6	2		3	5	

香川県庁舎 ⑦

国立代々木競技場 ⑤

広島平和記念館③

※○の数字は表の該当数を示す。

多く、コルビュジェは〈人・社会〉〈都市〉、丹下は〈伝統〉〈技術〉の割合が多い点において、違いがある。これは、二人が建築自体の内容である〈構成〉と〈性質〉を通して建築論に影響を与えてきたことが言える。また、その建築を通してコルビュジェは新たな生活像といった〈人・社会〉の内容、丹下は日本らしさの表現や構造といった〈伝統〉と〈技術〉の内容に関することについて、建築論に影響を与えたと考えられる。

3-2. 建築家 －｛参照根拠｝の比較

図５より、各建築家の｛参照根拠｝の特徴と傾向を比較する。全体の傾向を考察すると、どの建築家の割合にも偏りがあることがうかがえる。この傾向から、それぞれ考察していく。コルビュジェ、丹下、カーンは｛建築をつくる方法を抽出｝の中のカテゴリーである｛建築表現を追求｝の割合が多くを占めている。これは、建築論の中で、建築の表現を発展させるためにコルビュジェ、丹下、カーンの建築が参照された傾向を示している。具体的には、カーンの建築の〈材料〉や丹下の〈日本らしい表現〉などを抽出し建築をつくる礎にしていることが散見される。次に、ミースと伊東は｛建築･時代性の批評｝の中のカテゴリーである｛個別的な批評｝が多くの割合を占めている。ここからは、ミースの建築を〈構造〉や〈環境〉といった視点から否定的に参照することで外部との関係について再考するものや建築の構想するための手法の礎にしているものなどが見られた。

4. 結

本研究では、現代日本の建築論において参照される建築を【参照建築】〈参照内容〉｛参照根拠｝の視点から分析、考察することによって、建築論において参照される建築の特徴、傾向を明らかにした。

【参照建築】のカテゴリーごとの対応関係からは〈性質〉〈構成〉と｛建築を作る方法を抽出｝の関係が強く、建築論において建築の表現を追求する際に、建築の空間や形態について、参照される傾向がみられた。

各建築家の〈参照内容〉｛参照根拠｝の対応関係からは、コルビュジェや丹下といった参照される建築家の中でも代表的な建築家の対応関係の傾向と多く参照された具体的な建築作品がどのように参照されているのかを明らかにした。例えば、コルビュジェの【サヴォア邸】や【ユニテ】といった建築の〈参照内容〉からは複数の構成的視点で参照されている傾向がうかがえる。また、各建築家の〈参照内容〉｛参照根拠｝について、それぞれ傾向を比較した結果、建築論の中で各建築家の建築作品が特徴もって参照されている傾向がみられた。

以上より、現代日本の建築論において参照される建築の視点から建築論の枠組みの一端を明らかにした。

注

1) R・ヴェンチューリは『建築の多様性と対立性』(訳 伊藤公文 鹿島出版会 1982) にて過去の建築を参照し新たな思想について述べている。

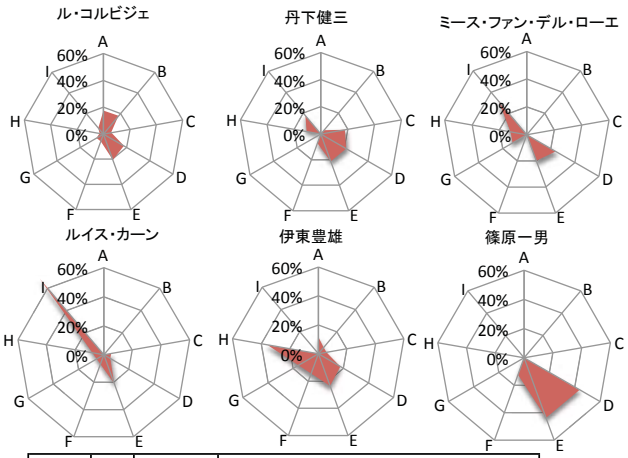
2) C・ロウは『マニエリスムと近代建築』(訳 伊東豊雄 松永安光 彰国社 1981) にて透明性の概念についての考察を述べている。

3) 建築論の定義は『建築論』(著 森田慶一 東海大学出版 1978)、『建築論事典』(日本建築学会編 彰国社 2008) で記され、定義は広く、状況によって変化するため、一定ではないことが述べられている。そこで、本研究で対象とする建築論は、建築家の重要な論理を提出する場であると考えられる「新建築 (1960～2016 年)」の「巻頭論文」「論文」「巻頭論壇」とする。

4) ここで言う具体的な建築とは、建築物の固有名詞のことを指し、「町屋」「倉庫」「住宅」などの総称された建築単語などは含まない。

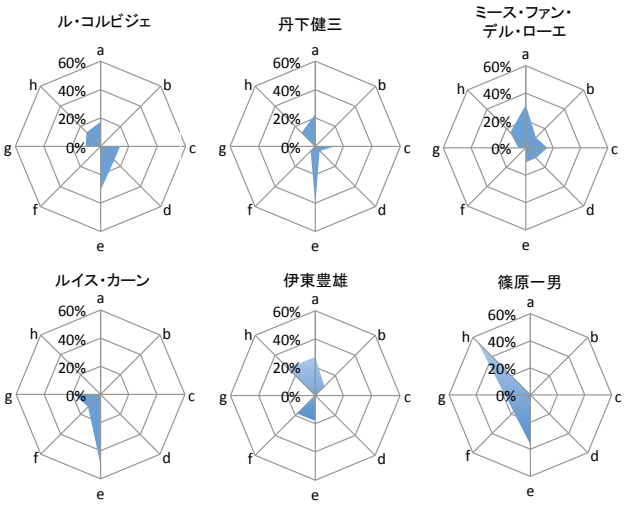
5) 北澤ら:1970 年代以降の建築専門誌における建築の歴史に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠) pp601-604 2015.9

6) 本研究の多く参照された建築家とは、建築論において建築家自身の建築作品が 10 回以上参照された建築家とする。



人･社会	都市	歴史･伝統	建築					
			構成	性質	つくり方	概念	機能	技術
A	B	C	D	E	F	G	H	I

図４　各建築家の〈参照内容〉の割合



建築･時代性の批評			建築をつくる方法を抽出			建築における概念を明確化	
個別的な批評	時代性を把握	時代からの逸脱	建築の形式を抽出	建築表現を追求	設計姿勢を学ぶ	根源へ遡る	新たな視点を提示
a	b	c	d	e	f	g	h

図５　各建築家の｛参照根拠｝の割合

*1 株式会社　長大　　Chodai co.,Ltd.
*2 室蘭工業大学大学院　准教授　　Assoc.Prof, Muroran Institute of Technology